

全国適応指導教室連絡協議会 第23回全国会議 講話B
「フリースクールとの相互理解や連携強化について」

NPO 法人フリースクール全国ネットワーク
代表理事 奥地 圭子

1. ごあいさつ・自己紹介

フリースクール「東京シューレ」を創設して31年になります。

最近の国の動きの中で、全適連の森会長ともお近づきになり、そのご縁で、このたび、全国会議にお招きいただきまして、まことにありがとうございます。

フリースクールは学校外の子どもの居場所・学び場・活動の場であり、学校へ行っている子は学校へ通っていますので、フリースクールへ来る子は、主として不登校の子どもということになります。皆さんが関わっておられるのも不登校のお子さんだと思いますので、不登校の子どもの成長支援ということでは全く一緒の仕事をしていると思っております。

ただ大きく違うのが設置主体で、適応指導教室は公的に運営され、フリースクールは民間による運営であるという点です。しかし、現在、国や都の方向もそうですが、公民の枠にこだわらず、地域の不登校の子どもが楽しく生き生きと自立に向けて成長できればよいわけで、そのために連携をしていくことがとても大事だと思っております。

連携にあたっては、まず、知るということ、知り合うことが大切ですから、今日、機会を作っていただけなのは、まったくありがたいことだと感動しております。

2. フリースクールが生まれたわけ

フリースクールの概念も人によってさまざまですが、一般的には、学校外の子どもの居場所・学び場を指します。もともと日本にはなかったものですが、不登校の増加を背景に広がってきた、といえます。

私が東京シューレを開設したのは1985年です。学校以外に場を作ったということが誤解されて、「学校否定だろう」ととられました。全くそういうことではなく、学校に行かない、行けない子どもの場が必要だと思ったのです。それには、わが家の登校拒否体験とその後の親の会で起きたことが大きいです。

長男が小学校3年生の頃、家を転居し、転校しました。1978年頃のことですが、当時、人と少し違くと、それをタネにいじめられるということが広がっていました。息子は、転校生のうえにメガネをかけていたために、からかいからイジメに発展し、そのうえ、先生に対する

不信感、学校の雰囲気は前の学校と違って息苦しい、などが重なり、朝登校しようとするとう腹痛、頭痛、吐き気など今でいう身体症状が出て、登校したり休んだりを繰り返すようになりました。当時、まだ登校拒否が増え始めて3年目頃で、情報もなく、登校拒否の何たるかをまったく理解していなかった私と夫は、休まれるほうが心配で、本人の立場に立って考えるよりも、はげましながら頑張らせて登校させました。その無理は5年生の運動会の日拒食症となって現れ、以後、ぷつぷつと登校できなくなりました。幸い、子どもの側から考える国立病院のドクターと出会い、「ぼくはぼくでもよかったんだ」と本人が思うようになり、元気を取り戻し、大検をとって大学へ、そして大学院と進学し、念願の科学者になりました。

この、苦い、貴重な経験から、子ども側に立って考える大切さに気づき、その後、たくさんの親の相談が来るようになって、その状態がたいへんな例ばかりで何をしたらいいのか悩みました。そして、まず親が子どもを理解し、子どもから見て安心できる家庭になること、また親も大変なので、親の支え合い、学び合いが必要だと思い、「登校拒否を考える会」を始めたのが1984年1月です。

親の会を1年半くらい続けるうち、理解され、楽になった子どもが、ぽつぽつと親と一緒に会に来るようになり、公民館を借りるときに、親の懇談の部屋と数人の子どもが自由にしゃべったり遊んだりする部屋との両方を借りるようになりました。

その子供たちが、「普段行くところがない」「友だちを作りたい」「スポーツもやりたい」「親の顔は見飽きた」と言うので、ふと思いついたのが「そうか、この子たちのニーズを満たすには、学校以外にどこか行ける場所があって、出会ってスポーツや音楽や気になる学習をできる場所があればいいんだ」ということです。今ではフリースクールは知られていますが、コロンブスの卵。子どもから気づかされました。まだ、適応指導教室もない頃です。

3. フリースクールはどんなところ（別資料参照）

- i) おおむね、月曜～金曜、朝から夕方までの開室、自由に通ってくる形になっているのがほとんどです。学習や進路についてなど学年や発達を配慮して行ったほうがよいもの以外は、小学校1年生から10代後半、場合によっては20代前半まで、異年齢で、話し、遊び、活動し、行事に取り組んでいます。
- ii) 活動内容は多岐にわたり、学習活動、音楽・演劇・美術系などの表現系、アウトドアや合宿・旅行、ものづくり、イベント企画などに取り組んでいます。ただし、強制ではなく、本人がやりたいこと、みんなでやろうと決めたことに参加していきます。まんべんなく学習するよりも、個性を伸ばし、その自分に自信を持ってもらいたいと思っています。
- iii) 通い方や参加の仕方は、自分のペースが尊重され、スタッフは、その子の気持ちや状況を受け止め、本人のニーズに応じながら、安心して過ごせるように配慮します。集団が苦手、大人数だと緊張してしまう、ここでもイヤなことに遭うかもしれないと不安で萎縮した状態でやって来る子どもも多く、安心できる環境だと感じてもらうこと、そして自分の居場所があると思ってもらうことがまず大事だと考えています。
- iv) そのために、スタッフは指導者と生徒というより、共に居やすい存在となり、子どもの話

をよく聞き、信頼関係を作ることに日々努めています。子ども中心の考え方をとっているフリースクールが多く、週1回ミーティングを開いて、行事やルール、どんな講座を開きたいかなどを出し合って、子どもたちの話し合いで決めていっております。

- v) 子どもの安定した成長と自立には、子どもと関わることはもちろんですが、私たちは、保護者との関わりがいっそう重要であると認識し、不登校・引きこもりだというお子さんの親の会を定例開催し、また親の方々との個別面談も重視してきました。全国的なつながりあいも作っております。親が孤立しないことが大切です。
- vi) 運営は、学校制度外のため、公的な経済支援がないため、親の拠出する会費を主たる運営費とし、あとは寄付金や助成金を探します。小規模なところが多いのがプラスでもあり、マイナスでもあります。
- vii) 学校制度との橋渡しとしては、1992年より、校長裁量で、民間施設に通う日数を学校の出席日数にカウントしてよいことになりました。そのために私たちは、開室日数と出席日数、フリースクールでのその子の様子などを学校に報告しております。また93年より、通学定期で通うことを認めていただいています。

以上、個々のフリースクールはみな違いがあり、多様ではありますが、おおむね上記のことは言えると思います。つまり、不登校の子どもの成長支援をするところであり、その子の気持ちや状況に応じながら自立に向けて様々な活動をしているところだというのは、多くの教育支援センターと似ているのではないかと思います。高校、専門学校、大学、大学院、高卒認定資格の取得、学校ルートではなく働いたり、音楽や映像をやったりして進路をつくっているということについても、一緒であるといえると思います。

4. 教育支援センターとフリースクールの今後の方向

- i) 子どもや親にとって合っているところで育つことができれば。

国の「フリースクール等検討会議」と「不登校に関する調査研究協力者会議」が合同で第5回会議をやったとき、教育支援センターで育って弁護士になった方とフリースクールで育って、いま大学で農業を学んでいる方の体験が、本人から話されました。どちらも、不登校で苦しいときがあり、どちらにも居場所があり、学ぶ意欲がみなぎってきて、周囲の理解と応援があつて、今があるという話でした。適応指導教室との出会い、フリースクールとの出会いが本人にとって、とても大事な出会いとなったのです。

どこで学ばないとダメ、という問題ではなく、本人が自分に合ったところで安心して学び、自信を持ち、自分らしい人生を歩んでいくことが大事だと思いました。

- ii) しかし、これまで何となく、教育支援センターとフリースクールは、一部地域を除いて、公民の違い、学校復帰を目指すかどうかの違い、親から見ると費用負担の違いなどから、あまり相互に積極的に情報交換や支援の協力をしあうことがなされてこなかったと思います。もっとも大事なのは、子どもがハッピーに成長できるか、かけがえのない自分を自分で大切に思い、しっかり歩んでいけるかどうかです。

同一地域に両方あれば、合っているほうを選べればいいし、片方しかない地域は、できるだけ居場所になっていけばいいし、両方ない地域は、今後増やしていくことを考えればよいと思います。現在の国の方向は、教育支援センターの増設に向かっております。

子どもが育つには、いろいろなところがあることが大事だと感じます。東京シューレは、22年間フリースクールをやってきましたが、今から10年前、特区で不登校の子ども対象の中学校を作りました。そこでよく分かったのは、同じ不登校の中学生でも「学校はイヤ、フリースクールだから通える」という子と「ぼくの通える学校をさがしたいんだ」という子がいて、フリースクールだけやっていたら、会えなかった子たちがいることでした。そしていまは、学校外のシューレも学校としてのシューレも、一緒に、仲良く、スポーツ交流会やフェスティバルなどを行っております。

私たちの今の社会が持っている仕組みを生かし、それを社会資源として踏まえ、多様で複雑になってきている日本社会で、困難にぶつかってしまった子どもが希望を失わずにやっていけるように、今後も教育支援センターと力を合わせ、学び合いながら共にやっていたら幸いです。まずは知り合うことからではないか、と思っています。垣根を越えて、つながり合いましょう。よろしくお願いいたします。

【奥地圭子（おくちけいこ） プロフィール】

1941年生まれ。1963年より22年間、東京・広島で公立小学校学校教員。わが子の登校拒否から深く学び、親の会「登校拒否を考える会」を始め、その活動の中から学校外の子どもの居場所・フリースクール「東京シューレ」を開設、2015年6月で30周年を迎えた。親の学び合いやフリースクール同士のつながり合い、全国不登校新聞社をNPOで立ち上げるなど、不登校支援について全国的な活動も展開している。

主な経歴 「登校拒否を考える会」代表（1984年～）
「NPO法人東京シューレ」理事長（1985年～）
「NPO法人 登校拒否・不登校を考える全国ネットワーク」代表理事（1990年～）
「NPO法人 全国不登校新聞社」代表理事（1998年～）
「NPO法人 フリースクール全国ネットワーク」代表理事（2001年～）
「東京シューレ葛飾中学校」開校・校長（2007年）
「多様な学び保障法を実現する会」共同代表（2012年～）
文部科学省「フリースクール等に関する検討会議」委員（2015年～）
東京都「不登校・中途退学対策検討委員会」委員（2015年～）
東京学芸大学教育学部「多様な学びと子ども支援」前期講師（2016年）

主 著 『フリースクールが「教育」を変える』東京シューレ出版、2015年
『僕は僕でよかったんだ』東京シューレ出版、2012年
『子どもをいちばん大切にする学校』東京シューレ出版、2010年
『子どもは家庭でじゅうぶん育つ』東京シューレ出版、2006年
『不登校という生き方—教育の多様化と子どもの権利』日本放送出版協会、2005年
『登校拒否は病気じゃない—私の体験的登校拒否論』教育史料出版会、1989年